

関ヶ谷自治会ホームページではカラーでご覧いただけます

## 防災V.Gと共に地域の安心 安全 そして減災に取り組む覚悟です

自治会長 山本 覚

今年で発足7年目となる防災ボランティアグループ（防災V.G）の協力を得て、自治会会長としての1年間、防災に係わってまいりました。

防災V.Gはもろろ自治会員と共に、地域の安全・安心と「災害時の互助」に役員全員で関わっております。

私は、6年前の東日本大震災時に、「帰宅困難者」となり、家族と連絡が取れなくなり眠れないほど心配をして、備えの大切さと隣人の助けを痛感しました。

東日本大震災以後毎年のように大地震や噴火、水害など大規模災害が発生しています。

2017版「全国地震動予測地図」の公表では、30年内震度6弱以上の揺れの確率、横浜81%と全国2番目となっております。

こうした状況に、関ヶ谷地域は岩盤の上であり倒壊や、隣の住宅との間隔も広く延焼の心配もさほどないといった話を聞きます。この手の過信等が予期せぬ被災に陥るのではないだろうか。

「自助」による備えを万全にして「近助（＝向こう三軒両隣を知り助け合う）」が機能する地域でありたい願っています。

ぜひ、新会員名簿の防災ページをお読みいただき、悔いのない備えと「近所付き合い」を深化していただきたいと思います。



## 東日本大震災から6年。 震災復興の今は どうなっているのでしょうか！

### ◆今もなお2553人が行方不明！ 仮設住宅になお3万5000人

東日本大震災の影響で、1万5893人が死亡。今も2553人が行方不明だ。震災の関連死は3523人に上る。

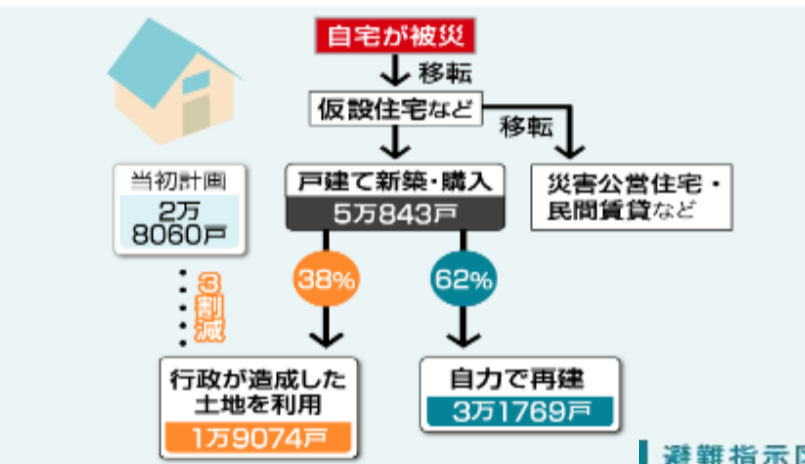
プレハブの仮設住宅に暮らす人は、岩手、宮城、福島3県で3万5000人。阪神淡路では仮設住宅は5年で解消した。震災規模の違いがあるにせよ、復興の遅れを示す数字である。

もう一つの問題は、住人の高齢化である。65歳以上の高齢者が占める割合は、3県で30%〜43%と高く、自宅再建意欲を失った高齢者への対応が急がれる。

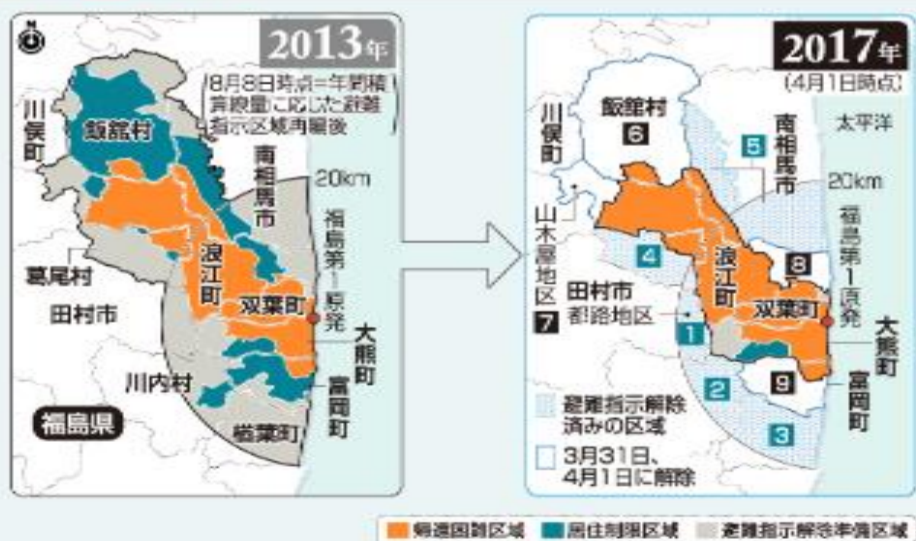
### ◆自力再建が6割超

東日本大震災後、岩手、宮城、福島で供給された戸建て住宅は5万843戸。自力再建が3万1769戸で62%。公的制度を利用したのは1万9074戸。実際の利用は、7割弱にとどまっている。理由の多くに待ちきれずに住み慣れた土地を離れていった人が増えているという実態があるという事である。

住まいの復興の流れ



避難指示区域の変化



### ◆風化の影、応援職員が不足

被災地自治体に応援要員を派遣する相互協力システムに、発災から6年を経過して、風化の影がみられる。3県で復興に必要な要員が約230人、建築など技術職員が150人不足している。健康を守る保健師の要望も強い。昨年の熊本地震発生を機に、応援職員を引き上げる動きも有った。

復興にはまだまだ長い道のりが残されている。



## 要援護者宅の訪問記

防災V.G 第3グループ

リーダー 服部 堯夫

平成29年4月24日〜26日、第1・2・3地区の要援護者宅を、民生委員の戸次明子、大橋ひろみ、大島房子と、防災V.G第1・2・3グループリーダー陣座昭、松原正紀、服部堯夫で、会長挨拶文を持参訪問しました。

3地区合わせて138宅を訪問、在宅していた方が89宅、不在の方が49宅でした。

在宅の方々には関ヶ谷自治会の防災体制に感謝の言葉を頂きました。

不在の宅にはポストに書面を投函してきました。

\* 一人暮らしの健在な方がおり、援護者の方に廻って良いとの返事を頂きました。

\* 又、チャイムのみのお応答の方もいました。

● 消費生活総合センターや、金沢警察署からの注意関係等のパンフレットも配付しました。



『家庭と地域で進める防災減災対策』  
熊本地震を経験して！

講師：矢守 克也氏 京都大学防災研究所教授

1 熊本地震からの経験：一人一人が家での備え

熊本で義母が（80歳代半ば）マンションでの一人暮らしの被災実例から学ぶ。

\* マンションは各家オール電化で地震による停電でフロア10cmの水浸し。

\* 災害対策でハンドバッグに入れて準備していた物：メガネ・健康保険証・お薬手帳・携帯電話・身障者手帳  
ボールペン・懐中電灯・笛：笛を吹き、懐中電灯をチカチカさせたので近所の方が助けに来てくれた。

\* 良かった点（〇印）

- 〇 懐中電灯を枕元に準備していた。
- 〇 携帯電話の充電器を準備していた。
- 〇 リビング・寝室に大きな家具を置いていなかった。
- 〇 避難訓練に参加していた。
- 〇 日頃から近所の方やマンションの人とお付き合いがあった。



\* 出来ていなかった点（×印）

- × 部屋を整理していなかった。
- × 台所・和室・玄関の家具の固定をしていなかった。

\* 準備していたが使わなかったもの（△印）

- △ 水・ペットボトルを準備していたが使わなかった。350mlの水をバッグに入れておけばよかった。

2 地震の想定について：本当に起きる想定外はない危ない断層はやっぱり危ない！

今後30年間に起きる危ない断層順（上位200位で実際に発生した！）

\* 熊本の日奈久（ひなぐ）断層帯：3位、布田川（ふたがわ）断層帯60位

熊本の最大値は1〜16%、（熊本の県・市はこんな大規模地震を想定していなかった）。

\* 因みに三浦半島断層帯7位（最大値11%）、相模トラフ70%、南海トラフ70%

\* 阪神淡路は8%と低かった。

『減災研修に参加して私の一言』徳岡正彦

被災者の実例から学ぶことはかなりでした。頭では理解していても備えができていないところから行動に移すことが第一です。実践するところが減災に繋がります！

出火を防ぐ「感震ブレーカー」設置の勧め

防火チーム 村山欽也

震災時に電気による火災が最も多いとのデータがあります。東日本大震災では地震による火災163件のうち、電気火災が108件と66%を占めています。

震度5以上の揺れを感じた時に自動的に電源を落とす「感震ブレーカー」は電気火災防止に効果があるということで、横浜市でも補助制度を設けて設置を推進しています。（ただし残念ながら当関谷台地区は補助の対象外です。）

ブレーカーの種類は

① 分電盤タイプ

（電気工事店による工事費用も含めて7〜8万円）  
② 家電量販店等で売っている数千円の簡易タイプ（自分で設置するもの） そのほかコンセントタイプのもの（数千円）等があります。



地震時の「通電火災」防止用  
ブレーカーアダプター

市で推奨している分電盤タイプは、揺れを感じて3分後に電源が落ちるのに対し、簡易タイプは揺れると同時に電源が落ちるため、夜間の避難に支障をきたすことも想定されます。このため市では手近に懐中電灯を用意するように勧められています。

もし感震ブレーカーを設置されない場合でも、白熱灯を紙や布など燃えやすいものの上や側に置かない、家具の転倒防止を徹底する、万一の場合にもショートしないよう配線に気を付ける、等の工夫をおくことが大事になります。震災時の火災は消防等の公的活動が期待できないため、地域全体に大きな被害をもたらしかねません。

身の安全の次に「火を出さないため」の工夫を一人ひとりが実行することで、防火の実を上げていきたいと思います。



消火訓練の防火チームの方々

スタンドパイプ式消火器・

消火訓練を実施

防火チーム 村山欽也

防火チームでは、3月18日（土）午前10時〜11時半まで、草舞台公園南側の消火栓を使用して、スタンドパイプ式消火器による訓練を実施しました。

防火チームの7人をはじめ、防災VGや自治会役員等計20人の方が参加されました。釜利谷消防出張所の井上所長にも指導と安全管理のため立ち会っていただきました。

訓練はスタンドパイプの取り扱いの慣熟を目的として年2回実施し、消火栓・ホース・放水の三人一組で、消火栓の蓋を開ける→ホースの結合→放水→後のホースの整理→消火栓のフタを閉めるまでが一連の訓練手順です。今回はできるだけ各自の訓練回数を多くする為、実際の放水を省いて実施しました。

参加された方からは「マニュアルには耳慣れない用語が多く、何回か訓練をやったと初めて手順を覚えられた」等の感想がありました。正直、実際に大震災が起きたとき、高齢化著しいボランティアが一台の消火器でどれだけのことが出来るのか不安はありますが、防火チームとして、自治会から預かっているスタンドパイプ式消火器を活用する手順を維持しつつ、火を出さないための知識や設備の普及を図ることで震災時の火災を減らしたいと考えております。

『防災部・防災ボランティア今後の活動予定』

- \* 防災バス見学会…6月8日、県防災総合センター：体験・見学、アサヒビール工場見学会、開成町あじさい祭見物
- \* 防災VG懇親会&炊きだし訓練…7月22日、自治会館
- \* 防災資機材チーム…6月に防災部の棚卸に立ち合い・資機材点検  
8月は納涼大会に使用する発電機の点検作業及びテントの設営、撤収
- \* 要援護者宅訪問…8・9月に防災VGの複数の担当者が要援護者宅訪問

\*\* 次回防災日より：H29年8月15日予定

自助・共助・公助

